

「主の十字架を負って」

マルコによる福音書 15章 16 - 24節

森島 牧人 牧師

今日与えられた聖書は、ローマ総督ピラトによって死刑を宣告された主イエスが、総督の官邸を出て処刑の行われる場所・ゴルゴタへ引かれて行かれるところです。

聖書には「兵士たちは・・・イエスに紫の服を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、『ユダヤ人の王、万歳』と言って敬礼し始めた。また何度も、葦の棒で頭をたたき、唾を吐きかけ、ひざまずいて拝んだりした。このようにイエスを侮辱したあげく、紫の服を脱がせて元の服を着せた。そして、十字架につけるために外へ引き出した。そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。」(マルコ 15:16-21)と記されています。

当時、十字架による死刑の判決を受けた囚人は、侮辱された後、自分がかげられることになっている十字架を担いで、刑の執行される場所まで歩くことになっていました。

さて、主イエスとの出会いは何時も思いがけなく訪れるのですが、今日の聖書で主イエスと出会うのは、北アフリカキレネ地方の古代ギリシャ都市に住んでいたシモンという男で、彼は当時ユダヤ人が多く住んでいたと言われるその町から、過越祭を祝うためにエルサレムに出て来ていました。

そのエルサレムで彼は、自分のことを「神の子・ユダヤ人の王」などと言って人々を惑わし、ついに十字架にかけられることになった一人の男の噂を耳にします。モーセの後継者ヨシュアと同じ名のそのとんでもない男を一目見たいと思った彼は、ゴルゴタへ続く道で群衆をかき分け、その男の通るのを待っていたのです。

そんな彼の目に飛び込んで来たのは、酷い辱めを受けて傷だらけになった身にぼろぼろの衣をまとった痛ましい男・主イエスの姿でした。それは、イザヤ書 53章の苦難の僕の預言「・・・彼は軽蔑され、人々に見捨てられ 多くの痛みを負い・・・屠り場に引かれる小羊のように 彼は口を開かなかつた。・・・」そのものでした。

その主イエスがシモンの目の前を通過しようとしたその時、突然十字架を背負ったままそこに倒れてしまわれたのです。慌てた兵士たちは、そこにいたシモンにイエスに代わって十字架を担ぐように命じます。あまりにも思いがけないことにシモンは困惑し逃れようとしますが、民衆を徴用する権限を持つローマ兵に逆らうことは出来ず、しぶしぶそれを引き受けたのでした。過越祭のために来た聖なる都・エルサレムで、死刑囚の十字架を担ぐことになろうとは・・・シモンは自分の運命を呪ったことだったでしょう。

しかし、この出来事は、単純に不運とは言えないように思われます。なぜなら人類の救いのために命を捨てられる主イエスに代わって十字架を負ったという彼の行為は、素晴らしく光栄な奉仕であったと言えるからです。つまり、十字架を強制的に担がされた結果、主の苦痛を和らげて助けることになったシモンは、主イエスの御業に協働したということになるのです。

マザー・テレサは、「苦しみはそれ自体は空しいものです。しかしキリストの受難を分かち合う苦しみは素晴らしい神様への贈り物です。人がささげる最も美しい贈り物とは、キリストと苦しみを分かち合うことです。」と言っています。シモンが主に代わって十字架を負ったことは、彼の神様への贈り物となったと表現することが出来るのです。

このように視点を変えて見ると、私たちの理解に苦しむ不運や不当な運命も、他の人への奉仕や贈り物となり得ると考えられるのです。人が誰かの代わりに重荷を負うことによって誰かが助けられ、また贈り物によって個人や集団が良い方向に向かうというようなことが、起こり得るのです。このシモンの物語はそんなことを私たちに示唆しています。

この後のシモンについて聖書には記されていませんが、聖書の中にシモン本人に加えて息子二人の名前もはっきり書き残されていることから、彼がこの後キリスト者となり、息子二人に十字架の恵みを伝えたというのは確かなことのように思われます。原始キリスト教会の人々は、主イエスに代わって十字架を負ったシモンとその家族を大きな喜びを持って愛し、シモン一家もまたそれに応えて素晴らしい証しをして行ったに違いありません。

無理やり負わされた主の十字架によって全く新しいものとなったシモン一家の人生・・・この神の驚くべき導きと御業を知る時、まさに心震えるような思いを覚えるのです。

(説教要約 羽入田悦子)